

②

平成十年度 第二回県下一斉模擬試験問題（二年国語）

時間一〇〇分 一〇〇点満点

《受験上の注意》

1. 解答用紙に学校名・組・号・氏名を記入しなさい。
2. 解答は必ず解答用紙の指定欄に記入しなさい。
3. 指定された方法以外で解答すると、誤りになるので注意しなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

いまの日本では、都会も田舎も変わりなく学校が荒れるという。じつはそれは、日本に田舎はもはやないからである。^①日本全国、どこにいても都会である。真の田舎はカソ^②となり、年寄りだけが住んでいる。そこには子どもはいない。子どもの問題でわれわれが直面しているのは、都市問題であって、子ども自体の問題ではない。じつは大人はそれをよく知っているはずだが、考えたくないのであらう、大人たちは都市化を「近代化」という美名のもとにスイシン^③してきた。いまさらそれはどうしようもないと「思っている」。犠牲になるのが子どもだが、子どもはそれに抗議できない。だから妙な反乱が生じる。

都市と子どもは折り合わない。そんなことは誰でも知っている。新宿の高層ビル街のようところが、子どもを育てるのに理想的なところだと、多くの母親は思わないはずである。私は鎌倉に生まれ育ったが、あるとき私が通っていた小学校の敷地を一部削って市役所が建った。そこにあつた神社は移され、池は潰^④された。そのとき私は、時代が変わつたと思つた。子どものものを削って、大人のものが作られたからである。建てた側には、子どものものを削つたという意識はないと思う。小学校は今でもあるからである。問題は暗黙の権利として子どもが利用していたものが削られたことである。

^④ その傾向はまさに滔々として日本中で進んだ。子どもの遊び場がなくなるといふ主張が一時あつたが、もはやない。いまでは大人の権利が当然になつた。土地みだいに値段が高いものを、ただ遊ばせて、子どもに利用させるなんてとんでもない。それが「常識」となつた。少年法改正がうんぬんされるのも、要は大人の範囲を拡張せよということであらう。^④できることなら、日本人全部を大人にしたいのに違いない。

これはもちろん自然と人工のせめぎ合いである。自然とは人間が作らなかつたもの、人工とは人間が意識的に作り出したもの。子どもはもちろん「A」である。いまでは親は、子どもを作るか作らないかを選択できる。だから、子どもを「B」と思わない人が多数派になつた。しかし、子どもすべてを「設計する」ことはできない。それなら子どもは「C」で、それを「D」の世界、約束事の世界に適応させていくのが「E」である。^④

人間社会は自然の背景の上に成り立つ。日本の文化や伝統は日本の自然と調和を保つて生じてきた。田圃と里山、ソウキ

林に代表される自然への「手入れ」の感覚は、同時に子育ての感覚だった。手入れとは、自然に「人手を入れる」ことである。そこでは自然の自主性が尊重されるが、それだけではない。その自然を手なずけ、できるだけ人間の意に添うように変更するという意味が含まれている。しかもそつしたからといって、かならずしもうまくいくというものでもなく、先行きが明瞭に見えるというものでもない。ところが組織のなかでは、先が見えないことなど、「顧だにされない」^⑥それなら子育てに先が見えるか。見えはすまい。しかしそれでも毎日子どもへの「手入れ」は続く。それは母親がいちばんよく知っていることであろう。それを風土という外部の自然への対応と一致させること、それはわれわれの祖先が作り上げてきた利用増だったそれをひたすら壊したのは現代のわれわれ以外になり。それなら答は明かではなかつか。^⑦初心に戻ればいいのである。

(毎日新聞掲載 養老猛司の文章による)

問一 傍線部ア～エのカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで記せ。

問二 波線部a～bのここでの意味としてふさわしいものを、それぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- a 「滔々^{たうたう}として」……………
 ア ゆっくりとはあるが着実に イ 一進一退をくり返しなが
 ウ 流れに逆らうように エ とどまることを知らず
- b 「顧だに^{こぼ}されない」……………
 ア 考えて見ようともしない イ 尊敬されることがない
 ウ 確かめてみることもない エ 批判さえされない

問三 空欄部[A]～[E]に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア [A]人工 [B]自然 [C]人工 [D]自然 [E]教育
 イ [A]自然 [B]自然 [C]自然 [D]人工 [E]教育
 ウ [A]人工 [B]人工 [C]自然 [D]教育 [E]自然
 エ [A]自然 [B]自然 [C]人工 [D]教育 [E]自然

問四 傍線部①「日本に田舎はもはやない」とあるが、筆者は「田舎」をどのようなところと定義しているのか。最も

適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 都会生活の中に自然が融合し、気軽に自然に親しむことができるところ。
イ 人々が日常生活を営む中で、自ずと自然への感性が養われていくところ。
ウ 近代化の影響から取り残されて、手つかずの自然が放置してあるところ。
エ 年寄りには住みやすいが、子供達にとっては日常生活が不便なところ。

問五 傍線部②の指示内容を二十字以内で説明せよ。ただし、「都市化」「遊び場」の二語を必ず解答に含むこと。

問六 傍線部③「時代が変わった」とあるが、その変化の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 子供の権利に比較的寛容だった時代から、大人の権利のみを優先する時代が変わった。
イ 子供が大人から権利を与えられる時代から、自ら権利を獲得していく時代が変わった。
ウ 今までにある自然を残そうとする時代から、人工的に自然を作り出す時代が変わった。
エ 無駄なものの中にも価値を見いだした時代から、効率のみを重視する時代が変わった。

問七 傍線部④「できることなら、日本人全部を大人にしたいのに違いない。」とあるが、「大人」がこのように考えるのはなぜか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 大人の常識によって日本人を均一化し、社会の安定とモラルの向上を図るため。
イ 大人の常識を日本人全体の認識とすることによって、真に豊かで平等な社会を実現するため。
ウ 大人の権利を優先した発想を、社会の常識としてあらゆる場面で適用できるようにするため。
エ 大人の考えと子供の考えとの差をなくすことによって、非行や犯罪を未然に防ぐため。

問八 傍線部⑤「自然への『手入れ』の感覚は、同時に子育ての感覚だった。」とあるが、自然への手入れがどのような点で子育ての感覚に似ているのか。このことを説明した部分を、解答欄の形式に合わせて本文中から三十字以内で抜き出して答えよ。

問九 傍線部⑥は自然について述べたものであるが、子育てについてこれと同じ内容を述べた一文を傍線部より前の本文中から探し、最初の五字を抜き出して答えよ。

問十 傍線部⑦「初心に戻る」とはこの場合どついうことか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 現代に生きるわれわれが、祖先の残した自然を大切に守り、子どもたちにも自然保護の精神を教え込んでいくこと。

イ 現代に生きるわれわれが、自然を手なずけようとして失敗したように、子どもを意のままに育てることは不可能だと認識すること。

ウ 現代に生きるわれわれが、自らが破壊した自然の代償として、子どもの遊び場としての自然を新しく作り出していくこと。

エ 現代に生きるわれわれが、自然と調和した生活を取り戻そうとする中で、子育ての感覚を身につけていくこと。

二 次の文章を読んで後の問いに答えよ。

五年生になって二学期の最初の日、教師が一人の転入生を教室に連れてきた。首に白い包帯をまき眼鏡をかけた小さな子だった。教壇の横で彼は女の子のように眼を伏せて床の一点をみつめていた。

「みんな」黄ばんだスポーツ・パンツをはいたその若い教師は腰に手をあてて大声で叫んだ。「東京から転校してきた友だちや。仲良うせな、あかんぜ」

それから彼は黒板に白墨で若林稔という名を書いた。

「アキラよ、この子の名、読めるか」

教室はすこし、ざわめいた。中にはほくの方をそつと振りかえった者もいる。その若林という子がほくと同じように髪を長く伸ばしていたからである。ぼくといえば、多少、敵意とも嫉妬ともつかぬ感情で、その首に白い包帯をまいた子供を眺めていた。鼻にずり落ちた眼鏡を指であげながら、彼はこちらをチラツと盗み見ては眼を伏せた。

「みんな、夏休みの作文、書いてきたやろ」教師は言った。「若林君はあの席に坐って聞きなさい。まず、戸田くん、読んでみろや」

転入生のことを教師が若林クンと読んだことが、ぼくの自尊心を傷つけた。この組で君をつけて呼ばれるのは今日までぼくが一人だけの特権だったからである。

命ずるままに、たち上って作文を読みはじめた。何時もなら、この時間はぼくにとって楽しいものなのだ。自分の書いたものを模範作文として皆に朗読することは大いに虚栄心を充たしてくれたのだが、この日は読みながら、心は落ち

着かなかった。斜め横の椅子に腰をおろした転入生の眼鏡が気になったのである。彼は東京の小学校から来ている。髪を伸ばし、白い襟^⑦のでたシャレた洋服を着ている。^①「負けんぞ」とぼくは心の中で呟いた。

作文の時、ぼくはいつも一、二カ所のサワリを作っておく。サワリとは師範出の若い教師が悦びそうな場面である。別に意識して書いたのではないが、鈴木三重吉の「赤い鳥」文集を生徒に読みかせるこの青年教師から賞められるために、純真さ、少年らしい感情を感じさせる場面を織りこんでおいたのだ。

「夏休みのある日、木村君が病気だと聞いたので、さっそく見舞いに行こうと考えた」とその日もぼくは皆の前で朗読した。

これは本当だった。けれどもそれに続く後の部分で、例によってぼくはありもしない場面を作りあげていた。病気の木村君のため、苦心して採集した蝶の標本箱を持っていこうとする。ネギ島の中を歩きながら、突然、それをやることに惜しくなる。幾度も家に戻ろうとするが、やっぱり木村君の家まで来てしまう。そして彼の悦んだ顔を見てホッとする……。

「よおし」ぼくが読み終わった時、教師はいかにも満足したように組中の子供を見まわした。

「戸田クンの作文のどこがええか、わかるか。わかっただ者は手をあげよ」

二、三人の子供が自信なげに手をあげた。ぼくなは彼らの答えも、教師の言いたいことまぼ見当がついていた。木村マサルという子に標本箱を持っていったのは本当である。だが、それは彼の病気に同情したためではない。きりぎりすの鳴きたてる畠を歩いたことも事実である。だが、これをくれてやるのが惜しいとは思いつまなかつた。なぜならぼくは三つほどそんな標本箱を父から買い与えられていたからだ。木村が悦んだことは言つまでもない。だが、あの時、ぼくが感じたのは彼の百姓家のきたなさと優越感だけであつた。

「アキラ。答えてみろや」

「戸田クンがマサルに標本箱……大切な標本箱、やりはつたのが偉いと思います」

「それは、まあ、そやけど、この作文のええ所は「教師は白墨をとると」良心的」という三文字を書きつけた。「ネギ島を歩きながら標本箱やるのが惜しゅうなつた気持ちをありのままに書いてるやろ。みんなの作文には時々、ウンがある。しかし戸田クンは本当の気持ちを書いている。良心的だな」

ぼくは黒板に教師が大書した良心的という三文字を眺めた。どこかの教室でかすれたオルガンの音がきこえる。女の

子たちが唱歌を歌っている。別にウソをついたとも仲間や教師をダマしたとも思わなかった。今日まで学校でも家庭でもそうだったのだし、そうすることによってぼくは優等生であり善い子だったのである。

ななめ横をそつと振りむくと。あの髪の毛を伸ばした転入生が鼻に眼鏡を少し落として黒板をじつと見詰めていた。ぼくの視線に気づいたのか、彼は首にまいた白い包帯をねじるようにしてこちらに顔をむけた。二人はそのまましばらくの間、たがいの顔を探るようになが覗いていた。と、彼の顔がかすかに赤らみ、うすい笑いが唇にうかんだ。(みんなはだまされてもネ、僕は知っているよ)その微笑はまるでそう言っているようだった。(ネギ畠を歩いたことも、標本箱が惜しくなったことも皆、ウソだろ。うまくやってきたね。だが大人をだましても東京の子供はだまされなないよ)

② ぼくは視線をそらし、耳まで赤い血がのぼるのを感じた。オルガンの音がやみ、女の子たちの声も聞こえなくなった。黒板の字が震え動いているような気がした。

③ それからぼくの自信は少しずつ崩れはじめた。教室でも校庭でもこの若林という子がそばにいる限り、何かうしろめたいものを感じるのである。勿論、そのために成績が落ちるといふことはなかったが、教師から皆の前でホメられた時、図画や書き方が壁にはられた時、組の自治会で仲間から委員にまつり上げられた時、ぼくは彼の眼をひそかに盗み見してしまう。

この子の眼と書いたが、今、考えてみるとそれは決してぼくをとがめる裁判官の眼でもなく罪を責める良心の眼でもなかった。同じ秘密、同じ悪の種をもった二人の少年がたがいに相手の中に自分の姿をさぐりあっただけにすぎぬ。ぼくがあの時、感じたのは心の呵責④ではなく、自分の秘密を握られたという屈辱感だったのだ。

(中略・この後、若林は誰とも打ち解けないまま転校してしまふ。)

夏休みがきた。ある暑い昼さがり、ぼくは学校にちかいネギ畠を一人で歩いてきた。草の間できりぎりすが息ぐるしい音をたて、むこうの乾いた路をアイス・キャンデーを売る男が自転車せまを軋こませながら曳ひきずっていった。

その時、突然、ぼくの心に昨年のおなじ夏休みに書いた作文のことが甦よみがってきた。木村という子に蝶の標本箱を持って見舞ったことを書いた作文である。あれは皆の前で朗読するために書いたものである。「赤い鳥」文集からおぼえたサワリで教師を悦ばすために書いたものである。その秘密を知っているのは、あの若林という子だけだった。

ぼくは家に走って帰った。部屋の中で自分が一番大切にしている万年筆を探した。父がドイツにいた頃、買ってきてぼくにくれたものである。ポケットにそれを入れるとぼくは木村の家に戻り、走って行った。

「これ、お前にやらあ」

「なんでや」牛小屋の前にたっていた木村は汗まみれのぼくの顔と万年筆とを狡そうに見くらべながら、少しあどすさをした。

「なんでもええんや」

「ふん。そんなら、もらうとくわ」

「ええか。誰にも言つたらアカンぜ。ぼくがやったと家のものにも、先生にも言つたらアカンぜ。アカンぜ」

帰り路、あのネギ鳥を戻りながら、ぼくはこの一年の間、自分の屈辱感を与えていたもの、あの子の嘲笑から抜けられると思った。にも拘らず草の中できりぎりすが暑くなるしい声をあげ、アイス・キャンデーを売る男がたちどまって道ばたで小便をしていた。ぼく④の心は白々とむなしかった。善いことをしたと言つ良心の悦びや満足感は一滴も湧いてこなかった……。

〔海と毒薬〕 遠藤周作

問一 傍線部⑦～⑩の読みをそれぞれ答えよ。

問二 傍線部①「(負けんぞ)」とぼくは心の中で呟いた」のはどうしてか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 東京から来た転校生を、学級内における自分の地位を脅かす存在として意識したから。

イ 転校生の澄ました態度の中に、優等生の詩文に対する鋭い反感を感じ取ったから。

ウ しゃれた格好の転校生が、自分を田舎者として見下すのではないかと危惧したから。

エ 利口そうな転校生のために自信を喪失してしまった自分を奮い立たせたかったから。

問三 傍線部②「ぼくは視線をそらし、耳まで赤い血がのぼるのを感じた」とあるが、「ぼく」の中のどういう気持ちがこのような反応を引き起こしたのか。具体的に説明している部分を本文中より十五字程度で抜き出して答えよ。

問四 傍線部③「ぼくの自信」とあるが、それはどのような自信であったか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 教師との強い信頼関係を持つ自分は、どの生徒もかなわない特別な存在なのだという自信。
- イ このまま勉学への努力を重ねるなら、いずれは教師の愛情を独占できるという自信。
- ウ 誰も口には出さないが、自分はこの学級で教師を超える絶対的な存在なのだという自信。
- エ 教師が望む理想の生徒像を演じることで、優等生として認められてきたという自信。

問五 傍線部④「ぼくの心は白々とむなしかった」のはどうしてか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 「ぼく」のせつかくの万年筆を木村があまり喜ばなかったことで、作文に書いたような感動的な世界は、現実には存在しないのだと失望したから。
- イ 「ぼく」は一番大切な万年筆を木村に与えたが、それは若林に味わわされた屈辱感を埋め合わせるための偽善的行為にすぎないと感じたから。
- ウ 「ぼく」は、大切な万年筆を与えるほどの自分の善良さを発見して若林を見返したような気がしたが、その若林はもはやおらず、徒労感に駆られたから。
- エ 「ぼく」にとって木村という少年は万年筆を与えるほどの友人ではなく、一時の衝動で取り返しのでないことをしてしまったことに気づいたから。

問六 本文を読んで、座談会が行われた。次の発言の中から本文の趣旨に合うものを選び、記号で答えよ。

- ア 「ぼく」はいつも優等生でいたかったために若林君と仲良くなれなかったんだね。若林君はせつかく「ぼく」に好意をよせていたのにかわいそうだな。
- イ そうかしら。誰でも触れられたくないことはあるんだから、若林君は「ぼく」の心の秘密を知ったとき、知らぬ振りをすべきだったと思うわ。ここではどうしたら他人の嘘を許せるかという問題が提示されているのね。
- ウ ぼくの意見は二人とは少し違うな。人は遅かれ早かれ二面性を持ち始めるものだ。「ぼく」は自分とよく似た若林の存在によって自分の二面性に気づかされたんだと思う。少年が成長していく一つの過程を描いた場

面なんだね。

工 みんなの意見を聞いてほくもだんだんわかってきたよ。人間には自分の知らない内に人をだましてしまうことが必ずある。特に幼い頃はなおさらだし、それに早く気づけば本当に良心的な大人になれることを教えてくれているんだね。

三

次の文章を読んで後の問いに答えよ。

中ごろ、年たかき尼の、さすがに人に知られてこころ乞食こころしありくあり。我が身のありさま、みつから語りけるは、「もとは四条の宮の半者、^①みなそこなむ云ひける。男の受領になりて下りける時、具して下らんといざなひければ、宮にも暇申し、さぶらふ人々にも其の由聞こえて、心ばかり出で立つ。おほやけにも旅の装束給はず。女房なども、おのおの扇・豊紙やうのはなむけあまねくこころざしけり。既に暁とて、重ねて事の由聞こえて、里に出でつつ迎への車を待つほどに、^②其の日音信もなし。あやしくて、もし下り延びたるかと尋ねれば、^③「はや、此の暁下り給ひぬ。北の方田あはさざら知らずして、此の夜中はかり、ただあらましかとこそ思ひつれ、^④まことには、我をおきて、誰を具して行くべきぞ」とむつかり給ひつれば、やがて、北の方もろとも下り給ひぬ。」と云ふ。悪心おこるなどはおろかなり。人のまつ思はん事も心つければ、^⑤其の後、宮へもまぬらず、やがて其の日よりきよまはりして、貴船たへ百夜まありして、申し侍りしやう、「我、おだやかにて、人を悪しかれと申さばこそは、かたからめ。^⑥彼の人を失ひ給へ。我を命を奉らん。もし、なほ生けらば、乞食する身となりて、後世には無間地獄におつる果報を受くるとも、それをば憂へとせず。ただこのいきどほりを助け給へ」となむ二心なく申し侍りし。^⑦この男は、ただ面目なくなんばかり心苦しく思ひやりて、さほど深く思ふらんとは知らざりけり。国に下りつきて、一月ばかりありける程に、かの北の方、湯殿におりたりける時、湯のけの中へ、天井の中より襪たはきたる足の一尺ばかりなるをさしおろしたるが見えければ、女房に『かれは見る』と問ひけれど、^⑧こと人には見えず。かくて、驚き恐れて湯もあみず、さわぎのぼりにけるより、やがて重く煩ひて、程なく失せにけりとぞ。

京にはいまだ百日にみだざりし程に聞きて、心の内の悦び、申しつくすべからず。其の後、とかく事たがひて、世にあるべくもなく衰へて、はてにはかく乞食をしありき侍るなり。ともすれば、罪ふかく恐ろしき夢など見え侍れど、^⑨さしも申してし事なれば、さらに恨むるにあらすなむ侍る。いたくきいせまりて後こそ、なにしに罪ふかくさる悪心を

発して、二世不得の身になりぬらむと思ひかへし侍れど、かひもなし」とぞ云ひける。

(『発心集』より)

- * 1 「乞食」…物ごい。 * 2 「半者」…(四条の宮に)仕える者。 * 3 「おほやけ」…帝。 * 4 「北の方」…正妻。
- * 5 「ただあらましかとこそ思ひつれ」…赴任することはないとばかり思っていましたのに。 * 6 「貴船」…貴船神社。
- * 7 「百夜まゐり」…願いを叶えるために百日間每晚、お参りすること。
- * 8 「襪」…沓をはく時、その下に用いる布製のはきもの。
- * 9 「二世不得の身」…現世、来世とも悟りを得ない身。

問一 傍線部①「給はず」、②「こと人」の単語の意味をそれぞれ答えよ。

問二 傍線部③「給ひ」、④「申し」は誰に対する敬意を表すか。それぞれ次の中から選び、記号で答えよ。

ア 尼 イ 宮 ウ おほやけ エ 男 オ 女房 カ 神

問三 傍線部⑤「あやしめて」の理由を説明したものと最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 男の有難い誘いを信じて待っていたのに、約束の当日になっても何の連絡もないから。
- イ 男について行く準備を万端整えていたのに、男が急に心変わりしたことが分かったから。
- ウ 誘ってきたのは男なのに、宮仕えをやめた途端、男が将来を悲観して通わなくなったから。
- エ 受領になつて地方へ下るといふ命令が、出発の日の朝になつて取り消されてしまったから。

問四 傍線部⑥「」我をおきて、誰を具して行くべきぞ」とむつかり給ひつれば」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 北の方は男が自分の他に女がいるということに気が付かずにいたが、自分を置いて地方へ下るといふ話には、さすがに浮気しているのではないかと不安を感じている。
- イ いつも自分の思うがままの行動をとる北の方は、ここでも地方へ下ることを拒めなかった頼りない夫を指図し、任地へ共に行くのは自分しかないと自負している。

ウ 北の方は一緒に住んでいるのは自分だという自負から夫の浮気に気付かぬふりをしてきたが、自分以外の女を連れて地方へ下るのは許せないと不満を訴えている。

エ 夫は一人で任地へ下ろうとしているのに、北の方は夫が誰かと一緒ではないかと疑いをかけ、その疑念を晴らすために自分を連れていくように強く迫っている。

問五

傍線部③「悪心おこるなどはおろかなり」の解釈として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 北の方が夫を憎むのは何とおろかなことであろう。

イ 北の方が嫉妬したことは言うまでもない。

ウ それを聞いた私は憎むどころではなかった。

エ 私は恨む気持ちを起こすほどおろかではなかった。

問六

傍線部④「其の後、宮へも参らず」の理由を説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 再び宮中でお仕える気力もないほど、男に約束を破られた傷は非常に深く、その傷を癒すために世間との交わりを断って宗教的世界で生きていく決心をしたから。

イ 宮中の人々には自分が地方に下ることを告げ、あたたかい心遣いまでしてもらっているため、いまさら宮中に戻ったところで自分のみじめさがつのるだけだから。

ウ 帝や宮をはじめ、周囲の人々の反対を押し切って男と下ったのに、北の方の介入によって男との仲がうまくいけなくなり、宮中では合わせる顔がなかったから。

エ 男と連れ添いたいという自分の願いを成就するためには、その代償として宮仕えという安定した身分を断念し、乞食になってもよいという覚悟を決めたから。

問七

傍線部⑤「彼の人」とあるが、誰を指すか。本文中より抜き出して答えよ。

問八

傍線部⑥「この男は」知らざりけり」とあるが、この部分の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 男は世間体を気にしているため、女の深い愛情をかえって重荷に感じ、自然と女のことを忘れようと努めた。

イ 男が北の方への配慮と女への強い愛情との板挟みにあって切なく思っていることに、女は気付いていない。

ウ 男は長年連れ添った北の方の愛情を確認して、北の方を連れて行ったが、女はその心変わりを知らなかった。
 エ 男はこの愛にかける女の異常なまでの執念を知らず、ただ約束を果たせなかったことを申し訳なく思っている。

問九 傍線部⑦「さしも申してしゝあらずなむ侍る」について、次の問いに答えよ。

- (1) 「さしも申してし」の「さ」の指示内容として最も適当な一文を探し、その最初の三字を抜き出して答えよ。
 (2) 「さ」に恨むにあらずなむ侍る」を口語訳せよ。

問十 波線部「我が身のありさま、みづから語りけるは」について、女は現在の「我が身のありさま」について結局どのように思っているのか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 現在乞食となった我が身も嫉妬心の虜となって非道な行為に走った報いであるため、後悔しながらも受け入れざるを得ないと思っている。
 イ 相手に裏切られた恨みの深さゆえに罪深いことをしてしまい、その報いがはからずも自分に及んでしまったことで強い自責の念にかられている。
 ウ 激しい憎しみの心から人を呪い殺してしまい、そのため乞食になったが、反面かねてからの願いが成就したため、良心の痛みもなく満足している。
 エ 男への深い愛情があだとなって、生き恥をさらすことになった今でも、それは自分の運命として覚悟していたことであつたため、何ら後悔していない。

四 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。ただし、設問の都合上訓点を省略した箇所がある。

前漢丙吉字少卿、魯国人。宣帝時、為丞相。嘗出逢群鬪者死傷横道。吉過之、不問。吉前行、逢人逐牛。牛喘吐舌。吉止駐、使騎吏問。「逐牛行幾

⑤ 掾史乃服以為吉知大体。
 有^ラ所^レ害^ス三^ハ公^ハ典^ニ調^リ和^ス陰^ニ陽^ヲ職^ト當^レ憂^フ是^ヲ以^テ問^レ之^ヲ。
 未^ダ可^ニ太^ハ熱^カ而^シ牛^ニ近^ク行^ケ以^テ暑^ヲ故^ニ喘^グ此^レ時^ニ氣^ヲ失^ス節^ヲ恐^ラ。
 相^ハ不^レ親^ニ小^ニ事^ヲ非^レ所^ニ當^ル於^ニ道^ノ路^ノ問^フ方^ニ春^ニ少^ク陽^ヲ用^ヒ事^ヲ。
 備^ハ逐^ス捕^ス歲^ノ竟^ニ丞^ニ相^ノ其^ノ課^ニ殿^ノ最^ニ奏^シ行^フ賞^ヲ罰^ヲ而^レ已^ス宰^ノ。
 吉^ク曰^ク「民^ノ鬪^ヒ相^ニ殺^ス傷^ス長^ノ安^ノ令^ニ京^ノ兆^ノ尹^ノ職^ト所^ニ當^ル禁^ス。」
 里^ノ掾^ハ史^シ獨^シ謂^フ「丞^ノ相^ハ前^ニ後^ニ失^レ問^フ或^ヒ以^テ譏^ス吉^ヲ。」
 ③

『蒙求』より

注 * 丞相：…天子を助けて国を治める最高官吏。後にある「三公」の一つ。「宰相」と同じ。

* 掾史：…下役人 * 長安令：…長安の長官 * 京兆尹：…京兆の長官

* 課殿最：…「最」は成績の上、「殿」は下の意で、成績の優劣を調べはかること。

* 少陽用事：…本来なら暖かくなつた程度の季節であるということ。 * 時氣：…氣候

* 三公：…天子を助けて国を治める三人の最高官 * 陰陽：…宇宙の万物のもととなる二種類の氣

問一 傍線部①「字、前、而已」の読みをそれぞれ答えよ。

問二 傍線部①「吉過之不問」とあるが、「吉」が「之」を特に気に留めなかつたのはなぜか。その理由の説明として最も

も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 役人にはそれぞれ担当すべき職分があり、町の殺傷事件は丞相である自分が扱うべき次元のものではないと考えたから。

イ 街の治安の悪化には丞相として責任を感じており、眼前の一つの事件よりもその全体的な解決策の方に関

心があつたから。

ウ 路上での出来事にいちいち関わっている暇はなく、部下に指図し監督するのが丞相である自分の立場だと考えているから。

エ 暑中に路上では牛も人も混み合い苛立っており、丞相である自分も一刻も早くこの混雑を抜け出したいと思っているから。

問三

傍線部②「牛喘吐舌。吉止駐、使責吏問」について、次の各問いに答えよ。

(1) 「使責吏問」を書き下し文に改めよ。

(2) 「吉」のこの行動は、「牛」の様子からどのようなことを心配したためか。その説明として最も適当な一文を探し、その最初の三字を抜き出して答えよ。

問四

傍線部③「掾史独々前後失問」とあるが、「掾史」が「丞相前後失問」と言った理由の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 丞相である吉が人間の死傷事件については不問のまま通り過ぎたのは、尋ねる機会を逸したためだろうと掾史は思ったから。

イ 人間の事件はともかく、人にむち打たれて苦しそうな牛の様子に同情する吉の憐れみを、掾史は度が過ぎていると思ったから。

ウ 重職を担う吉が人間の生命に関わる事件を問わず、牛については尋ねたため、事の軽重を間違っていると掾史は思ったから。

エ 人間であれ牛であれ路上で見た事件ぐらいに吉が足を止めるのは、丞相の責務から逸脱した行為だと、掾史は思ったから。

問五

傍線部④「宰相不親小事、非所当於道路問」について、次の各問いに答えよ。

(1) 「小事」とは、ここでは具体的にどついつつことを指しているのか。「吉」の言葉の中から五文字以内で抜き出して答えよ。

(2) 「非所当於道路問」を返り点に従って全部ひらがなで書き下し文に改めよ。

問六

傍線部⑤「掾史乃服以為吉知大体」について、次の各問いに答えよ。

(1) 「服」とは対照的な行為を、本文前半から一字で抜き出して答えよ。

(2) 「掾史」が「服」したのはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 吉が平凡な者には理解できないような神秘的な能力を備えていたため、丞相を務める者だけのことはありと掾史は吉を見直したから。

イ 吉が牛の様子から天候の異変にいち早く気づいたため、その明敏さに敬服するとともに、自分の浅はかさを掾史は思い知ったから。

ウ 吉が路上で遭遇した二つの事件の因果関係を直感し、ほぼその真相を突き止めていたため、その偉大な見識に掾史は恐れ入ったから。

エ 吉が丞相である地位にふさわしく、全体を考える視野の広さと本質を見抜く鋭さを持っていることに掾史は感動したから。